

風を起こす

<第31回>

与えられた仕事から逃げない

公立みつき総合病院リハビリテーション部
言語聴覚士 技師長

吉村 美佳さん

医療過疎化が問題となるなか、広島県の山間にある公立みつき総合病院は、先駆的な取り組みで周辺地域7万人の医療を担ってきた。高齢化率32%のまちで「最期まで地域で生きる」ことを支えるのは670名の職員たち。医師以外にいくつもある医療専門職の一つが言語聴覚士である。

地域包括支援センターの原点

平成17年の介護保険法改正により、区市町村に設置された「地域包括支援センター」。高齢者が要介護状態になっても住みながら地域で生活を続けられるよう総合的にサポートする機関だが、その原点と言われるのが昭和49年、公立みつき総合病院（旧御調国保病院）が始めた地域包括ケアシステムである。それは、在宅ケアに関する制度がなかった時代、同病院の山口昇医師が「寝たきりはつくられている」ことを突き止め、病院の看護やリハビリを家庭の中まで持つていく。「医療の出前」を始めたことに端を発する。取り組みは大きな成果を上げ、御調町（現

尾道市）では病院と行政部門である保健福祉センターを核に、地域包括ケアシステムが構築された。

「私が入職した昭和60年は、ちょうど病院の改革期でした。新入職員30名のうち職種に定めのない助手として採用された私は、1年後に言語聴覚士見習として配属されました」
現在、リハビリテーション部で言語聴覚士技師長を務める吉村美佳さんは、まだ言語聴覚士という職業がほとんど知られていなかった時代から30年近いキャリアを重ねてきた。

言語聴覚士の仕事とは

Speech-Language-Hearing Therapistを略して「ST」とも呼ばれる言語聴覚士は、



【よしむら みか】昭和40年、広島県御調町（現尾道市）出身。昭和60年、公立みつき総合病院に入職。翌年より言語療法業務に従事する。平成11年に実施された第1回言語聴覚士国家試験合格。介護支援専門員の資格も持つ。病院外職務として、全国国民保健診療施設協議会、地域ケア委員会リハビリテーション部会委員、尾道市シルバーリハビリ体操指導員育成なども行っている。

「言葉の障がい」と「食べることの障がい」に関わる医療専門職だ。

前者では、脳卒中や事故などで脳の言語中枢に損傷を受け、言葉によるコミュニケーションに障がいをもつ人に対し評価とリハビリを行う。失語症といっても症状は様々で、高次脳機能障害で「時計」のことを「はさみ」と言い間違えるような症状があれば、舌や唇の麻痺によって発音が正しくできないケースもある。また、重度になれば音声を発することができ



公立みつぎ総合病院は高度医療を行う地域の中核的総合病院。病院附属の保健福祉総合センターなど施設群を含め240床を備え、医師29名をはじめ670名の職員が働く



ない場合もある。

「失語症の患者さんは言葉が出てこなくても伝えたいことはあります。ですから、患者さんと接する時に一番大事なことは、何を言いたいのか感じ取ることでその姿勢です。この表情をしている時は何か困っているんだなとか、トイレに行きたいんだなといった具合に察知する。そうやって患者さんの気持ちに寄り添いながら、リハビリを提供していきます」

一方、後者の「食べることの障がい」では、嚥下^{えんげ}すなわち食べ物を飲み込むことに障がいを持つ人に対し評価、リハビリを行う。「食べる」という行為は脳での認識に始まり、唇、歯、舌、のど、食道、胃などを駆使しているが、加齢や病気などによりのどや食道の筋力が衰えてきたりすると、うまく飲み込めなくなってくる。

「嚥下障がいがある場合、まず水飲みテス

トや内視鏡、造影剤をつかったX線検査を行います。ですから、言語聴覚士は解剖学や生理学など基礎医学の知識も身につけていなければなりません」

言語聴覚士の養成は昭和40年代には始まっていたが、国家資格となつたのはそれから20年以上も後のことで、平成9年に言語聴覚士法が制定された。

既に実務者試験に合格していた吉村さんだが、国家資格化に伴い、再度、受験しなおさなければならなかった。臨床医学、臨床歯科医学、音声・言語・聴覚医学、心理学、言語発達障害学…試験科目は多岐にわたる。仕事と家事、2人の子どもの育児をこなしながら、土日は車で片道1時間かけて大学に通い1コマも漏らさず授業を受ける。休む間もない毎日だったが、その甲斐あつて、平成11年3月に実施された第1回国家試験では合格者として名を連ねることができた。

言語聴覚士国家試験は毎年約15000名が合格し、有資格者は現在2万5000名を数える。高齢化の進展に伴い、高度な専門知識と技術を持った言語聴覚士のニーズは年々高まってきている。

人がらしく生きるためのサポート

地域密着の医療機関としてリハビリにも力を入れる公立みつぎ総合病院では、現在12名の言語聴覚士が活躍している。平成22

年からは訪問看護ステーションの中にも言語聴覚士を配置し、訪問リハビリを行っている。週に1〜2回の訪問だが、圏域は広く、車で片道30分以上かかることもある。

訪問リハビリの対象となる在宅介護の患者は、脳血管疾患による身体麻痺など重度の障がいをもっていることが多い。寝たきり状態ですべてのことに介助を要し、食事も口からは取れず胃ろうで栄養を摂取している患者も珍しくない。

「ご家族から、何とか口から食べさせてあげることができないでしょうか、と言われることもよくあります」

ツバさえ飲み込めないほど嚥下機能を失った患者が、果たして口から食べられるようになるのか。もちろん患者の能力と介護者の関わり方によって、口から食べられるようになる患者もいる。ただ、何カ月先に「やはり無理だった…」と肩を落とす家族の姿がはつきりと見えているのであれば、最初から「口から食べさせることはできません」と伝える言語聴覚士もいるだろう。しかし、吉村さんは、可能性が限りなくゼロに近いとわかっていても、一縷の望みをかけて家族や本人の要望に応えようとする。

「在宅介護は介護をしてくれるご家族がいてこそできることです。だから、訪問リハビリでは患者さんだけでなく、介護をしているご家族も支えるようにしています。大事なことは、ご本人がどうしたいか。そして、ご家族が患者さんとどう生活していきたいかで

すから」

延命治療を断ち、在宅療養をしている末期ガン患者の家族から「訪問リハビリに来てほしい」と呼ばれることもある。「生きていくことのわずかな楽しみとして、少しでも食べてほしい」——家族はその一心で食べ物や口を運ぶ。「この食べさせ方でいいんでしょうか？」——不安そうな家族に尋ねられた時、「それで大丈夫ですよ。〇〇さんも食べることで喜んでおられますね」と共感するだけでも、家族にとっては支えになるという。

「私たちがリハビリで機能回復の訓練をするのも、つまりは人が人らしく生きていくことを支えるためです。その中でも、口から食べるというところにこだわっていきけるのが言語聴覚士だと思います。だからこそ、難しいとわかっていても、最期の最期まで口から食べることをあきらめたくないですし、それができるところにやりがいを感じます」

無謀に思える旅行が与えた影響

一方で「口から食べられるようになること」を目指し頑張つて介護をしてきた家族が、もう無理だと知れば目標を失ってしまふ。そうならば、それまでの生活が崩れてしまいかねない。そういう時には家族の目標を他に向けさせる。口から食べさせることができないうちから寝たきりの患者と家族に「やまびこの会の旅行に参加しませんか」と提

案することも、一つの選択肢だ。

「やまびこの会」とは、失語症を中心とする言語障がい者の仲間づくり、家族間の交流などを目的に設立した会で、定例会のほかに年1回の旅行を続けてもう25年になる。寝たきりで床ずれができやすく、機械で頻繁に痰を吸い出さなければならぬほどの患者を旅行に誘ったこともあった。周囲には無謀に思えても「旅行に行く」ことは家族にとつて新たな目標となった。

「ご家族のためになんとか実現させたい」——吉村さんは、問題点を洗い出し、それをクリアするため各分野の専門家の知恵を借りた。長時間の移動に耐えられる良いクッションはないか、オムツをどうすればいいか、作業療法士や介護福祉士にアイデアを求めた。主治医に旅行の許可を直談判に行くと「大変だと思ふよ」と言いながらも、最後は後押ししてくれた。

リフトバスで片道4時間の旅は確かに大変だった。機械や用具などをぜんぶ持って行かねばならず、大荷物になった。

「患者さんは意思表示ができない方でしたが、旅行後はどこか雰囲気が変わりましたし、ご家族にとつては大きな自信になったようです。それに寝たきりで旅行なんて絶対に無理と思つていた周囲の見方が変わったことも大きかったですね。えッ！こんな重症の人が旅行できたんだ、という驚きが、自分もやってみよう変わる。すると、今まで寝たきりが当たり前だと思つていた人にも、参加で

きることはないか、サポートする人たちが探す。そういう人を増やせたことも収穫でした」障がい者が外に出ていくことで、社会的な環境も少しずつ整ってくる。旅行を始めた頃の25年前は階段昇降もすべて人海戦術だったが、今はバリアフリーの建物が増え、リフトバスも普及してきた。

「患者さんやご家族も変わるし、社会も変わってくる。その変化を見るのが面白くて……」やまびこの会の旅行は完全なプライベートで、すべて自費で参加する。カスタマイズされた旅行はツアーに比べてかなり割高になるが「それに見合うだけの喜びや充実感を得られ、その時の経験が次の仕事で生きてきます」と吉村さんは瞳を輝かせる。

当初、病院側から参加していたのは言語聴覚士だけだったが、今では若い理学療法士や作業療法士たちも「一緒に行かせてください」と言つてきてくれる。普段、訓練室では見られない患者の表情を見られるし、自身のスキルアップにもつながるからだ。

「会を継続していくには、若いスタッフの協力が必要です。そのためにも、面白そうだなと思つてもらえるような活動をしなければ……。若い言語聴覚士がやりがいをもつていろんな経験を積み、今後の地域包括ケアを支える人材に育つてくれることが、今の私の楽しみです。そのため、今、自分ができることを惜しまずやっていきたいと思つています」

「患者さんとご家族にとって大切な居場所

である会を守りたい」——吉村さんの思いは後輩たちに受け継がれていることだろう。

先輩たちの後に続いていきたい

吉村さん自身、先駆的に地域リハビリに取り組む先輩たちの背中を見て仕事をしてきた。「寝て、起きて、食べるという人間として当たり前のことを当たり前しよう。それをサポートしていくのがリハビリじゃないか」——当時は異端とされた先輩たちの考えにブレはなかった。地理的なハンデをもとめせず、その分野で先頭を切って走る人々を次々に呼んではお互いに支え合ってきた。最先端の話聞かせてくれた。

「先輩たちがやってこられたことが体の中に息づいていますし、私もその後に続いてい

けたらと思っています」

吉村さんにとって、言語聴覚士という職種は自ら希望して選んだ仕事ではない。「自分に与えられた仕事に真摯に向き合う」「置かれた状況の中で最大限の力を出し切る」——そうすることで自ずと仕事の幅が広がり、自分自身にもフィードバックされることを経験的に知っているので、これからもそうしていきたいと思う。

公立みつき総合病院は県のリハビリ拠点でもあることから、特別養護老人ホームや介護施設からの依頼で、嚥下障がいやテーマに職員研修をすることも多い。介護予防のシルバーリハビリ体操普及のための人材育成研修もある。仕事を立て込んでいっばいいっばいになっても「与えられた仕事から逃げない」ことを自らに課してきた。

「よくわからないまま、ただ必死にやってきたことが形になってきたんだと、最近ようやく実感できるようになりました」

医療やリハビリ分野は日進月歩で、知識や技術に追いついていくだけでもしんどい。人間相手の仕事にゴールはない。

「大変ですが、励みや喜びがあることに支えられてきました。今までの仕事をさせてもらえて本当によかったと思います。当院のスタッフとして地域包括医療・ケアを長く実践する中で、言語聴覚士の立場で地域を支えられることが本当に楽しいのです」

仕事を終えて家に帰れば4世代7人家族が待っている。炊事、洗濯と家事をこなし、お風呂から上がって一息つく瞬間が一番ホッとできる。休日は1週間分の食材の買い出しだけでひと仕事だ。

公私共に走り続けてきた30年、趣味を楽しむ余裕などなかった。今後やりたいことを問うと「全部投げ出しておのびりと過ごすことに憧れる反面、自分の両親を最期まで介護したい」と率直な気持ちを語ってくれた。「仕事では介護するご家族を支える側ですが、実際自分が支えられる側になった時、どう思うんだろうって。仕事で関わるのと、家族として当事者になるのでは全然違うでしょうから」

その覚悟があれば、きっと、自分自身、納得のいく介護ができることだろう。

（取材／ライター 更田沙良）



圏域の住民を対象に、介護予防のための講習会を開くことも吉村さんの仕事の一つ。シルバーリハビリ体操の普及のために、指導者となる住民を育てる講習会でも講師を務める